神奈川県秦野市

文部科学省委託事業「インクルーシブな学校運営モデル事業」中間成果報告会資料（令和7年度）

1.概要

【主担当部局】秦野市教育委員会 教育指導課

【主な関係部局】秦野市立末広小学校
神奈川県立秦野支援学校
神奈川県教育委員会特別支援教育課
神奈川県教育委員会インクルーシブ教育推進課

本事業の目的	【事業開始前における、各地域等のこれまでの課題】 ・特別な支援を求める児童生徒が増加する中、特別支援教育の免許保有者が全国同様2割程度で支援の専門性向上は大きな課題である。 ・本市では、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指している。 ・末広小学校校舎の一部に県立秦野支援学校知的障害教育部門小中学部が開設され、交流促進を図ってきた。
	【本事業を通して達成を目指す目標】 ・カリキュラム・マネージャーを中心とし、行事交流、日常的な交流にとどまらない、交流活動及び共同学習を実施する。 ・横浜国立大学教育学部に加え新たに東海大学体育学部や教育委員会の指導主事も加わり、共同学習の在り方を見直すことで教職員の専門性の向上を図る。 ・学校施設共用という環境を活用し、特別支援学校と特別支援学級・通常の学級に在籍する全ての児童生徒が、共に育ち共に学ぶインクルーシブな学校運営モデルを確立し市内外に発信することで、支援の専門性向上はもとより共生社会の実現を目指す必要がある。

学校運営連携校	小・中高等校	特別支援学校
	秦野市立末広小学校 （児童数）444名	神奈川県立秦野支援学校末広校舎 知的障害教育部門 （児童生徒数）小：25名、中：13名 （障害種）知的障害

カリキュラム・マネージャー		
	【配置人数】 1名	【主な経歴】 特別支援学級主任 総括教諭
	【本事業における役割】 ・ 交流及び共同学習の記録を指導案として整理 ・ 学校運営連携校間の調整 ・ 文献調査、アンケート調査・観察	

連携協議会			
	【構成人数】 16名	【開催回数】 3回	【外部専門家】国立大学教員養成学部教授1名
	【連携協議会において検討・議論した主な内容】 ・交流・共同学習の効果測定や子どもたちの変容、学びについて具体的な評価指標について検討。 ・交流・共同学習の実施事例や成果・課題を整理し、今後の教育課程への活用・整理方法について検討・整理。		

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

・現在進めている交流及び共同学習について、教育課程上の位置付けやねらい等を明確にした指導案として記録を残し、「何を」「どのように学ぶのか」について児童・生徒の発達段階や、指導内容を踏まえた指導形態・指導体制・評価方法も含めたカリキュラムの構築を進める。

実施内容

交流ビジョンと交流及び共同学習の実施内容（交流は各学年ごと）

	1年（2クラス）	2年（2クラス）	3年（2クラス）	4年（3クラス）	5年（3クラス）	6年（3クラス）	すえひろ級（5クラス）	行事等全体
キーワード	知る・慣れる 同じ場で学ぶ友達として、お互いの存在を知ろう。		触れ合う 一緒の学習をする中で、触れ合う経験をし、相手のことを知ろうという気持ちをもとう。		思いやる・関わる 一緒に学習する機会を積み重ねる中で、相手を思いやる気持ちを持って関わりを深めよう。		仲良く 一緒に学習する仲間として、仲良く過ごそう。	
末広小学校 児童目標	○支援学校の存在や名前、同じ学年の児童が学んでいることを知る。 ○同じ場で活動し、一緒に楽しい時間を過ごす。		○支援学校の児童と一緒に過ごす中で相手を知り、一緒に楽しんだり、ペースを合わせたりすることができる。		○支援学校の児童と一緒に過ごす中で相手を思いやり、尊重して関わることができる。		○小集団での合同学習を通し、友達と仲良く活動したり、役割を意識して活動したりする態度を養う。	
秦野支援学校 児童目標	○小学校の存在や名前、同じ学年の児童がいることを知る。 ○同じ場で活動することに慣れる。		○同じ場で活動する中で、相手からの働きかけを受け入れたり、積極的にかかわろうとしたりする。		○同じ場で活動する中で、相手との関わりを深めたり、集団の中で自分の役割を果たしたりする経験を積む。			
1学期	【体育】 ・50m走 【生活】 ・支援学校見学 ・夏さがし	【学活】 ・交通安全教室 【生活】 ・生き物さがし	【理科】 ・生物の観察 【図工】 ・にじみでできるもの 【体育】 ・フロアーボール	【社会】 ・クリーンセンター見学 ・校内の水道施設をさがそう	○委員会活動	○委員会活動	○給食交流（居住地交流）	・愛鳥週間 ・音楽鑑賞会 ・合同引取訓練
2学期	【生活】 ・むしをさがそう	【生活】 ・うごく おもちゃ	【社会】 ・消防設備 校内調べ ○運動会 表現ダンス見学	【図工】 ・版画 ○運動会 表現ダンス見学	【体育】 ・テニピン	【図工】 ・墨の絵 【体育】 ・とび箱 ○鼓笛隊見学	【音楽】 ・長調と短調（居住地交流） 【体育】 ・体ほぐし運動（居住地交流） ・ボール遊び 【図工】 ・染め出し ・あぶり出し ・共同制作（支援学校にて）	・夏期作品展 ・合同避難訓練 ・校内図工展 ・運動会練習見学

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

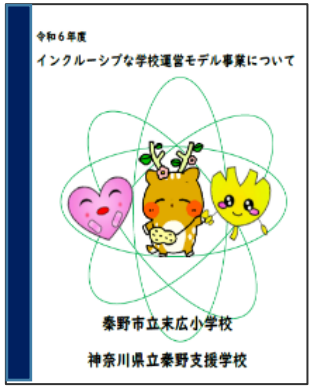
実施内容

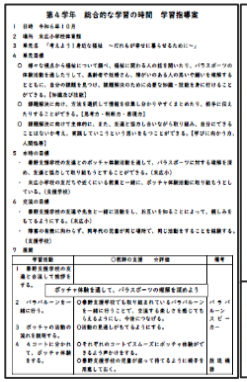
時間	1	2	3	4（本時）
ねらい	友だちと一緒に活動する雰囲気に慣れ，体を動かす楽しさを感じる。	サーキット運動を通して，いろいろな動きに親しむ。	自分の体力に合わせて，動き続けることを楽しむ。	友だちと関わりながら，運動やゲームを楽しむ。
展開	1 集合、挨拶 2 目標をたてる 3 場の準備をする 4 心と体をほぐす リズム遊び 準備体操でリズム遊びをする ・みんなでリズムに乗って踊る。（エビカニクス・らーめん体操） 簡単な動き （歩く・止まる・手をたたく） サーキット運動 ・走る・跳ぶ・くぐる・転がすなどの複数のコース ・場を移動しながら、友だちと関わって体を動かす。 ・音楽が流れている時間はサーキット運動を継続するようにする。 ・休憩ポイントもあり、友だちを応援する場面もあり 風船などを使った自由遊び（触る・転がす） 振り返り→片づけ			
知		②観察・カード	①観察・カード	
思				②観察・カード
態	④観察・カード	②観察・カード	③観察・カード	
交	2年2組 支援学校	2年2組 支援学校	2年2組 支援学校	2年2組 支援学校

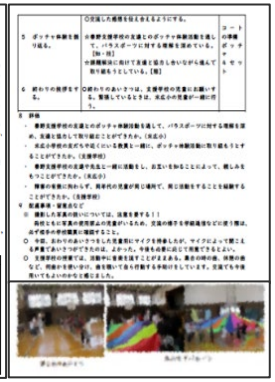
2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

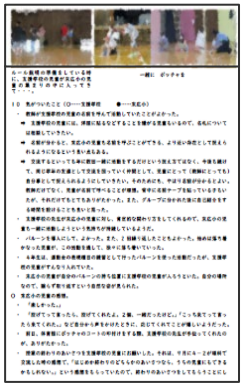
指導内容・指導方法の工夫

・これまで単発的になりがちであった交流及び共同学習について、今年度は体育科において単元を通した指導計画を立て、継続的に実施できるよう指導内容及び指導方法の工夫を行った。
・ 前年度のうちに、両校間の学年ごとに話し合い、交流および共同学習の年間指導計画を策定し、計画をもとに交流を実施することができた。
・授業後には両校の教員が、子どもたちの学習の様子や見立て、参加の状況、指導に対する所感等を記録し、その内容を基に指導内容・指導方法の改善を図った。



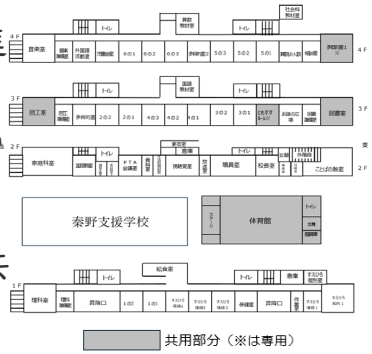






交流及び共同学習の成果

・環境面の整備を通して、交流及び共同学習の基盤づくりが進んだ。具体的には、支援学校が利用できる共有スペースの確保や作品・名前の掲示により、相互理解が促され、支援学校児童が日常的に小学校を利用する姿が見られるようになった。
・また、支援学校児童が体育館を利用できる時間（コマ）を設定したことで、学習活動や学校生活の場が広がり、交流及び共同学習の継続的な実施につながった。



3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

・支援学校のグループリーダーと小学校の教務主任が毎朝、お互いの学校生活の流れや一日の活動の内容を共有し、特別教室や各施設の使用などについての確認をスムーズに行うことができている。
・ 末広小学校のカリキュラムマネージャーを補佐する役割として、支援教育補助員を配置し、資料の整理、カリキュラム・マネージャーが本来在籍校で担う業務のサポートを行っている。
・横浜国立大学大学院教育学研究科　高度教職実践専攻　教授を外部講師として招聘し、研究の方向性や、交流及び共同学習に関する指導・助言をお願いした。今まで培ってこられた「自然な形」での交流及び共同学習の背景・要因を、言語化できるとよいとアドバイスをいただいた。
・ 東海大学体育学部体育学科 教授の支援も受け、ユニバーサルデザインやアダプテッド・スポーツの視点から助言をいただき、授業づくりや学習環境の改善に生かした。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

・ 校庭や農園、体育館、図書室などの特別教室を共用しているため、日常的にお互いの学校生活が常に一緒にあり、自然と同じ末広の子という意識の高揚につながっている。
・ 両校の管理職の柔軟性のある対応により、両校の教員は同じ学校の教員同士であるかのように、スムーズに授業に参加することが出来ている。
・ 両校間で、各学年の教員が直接連絡を取り合って、授業準備をすすめた。
・ 特別支援学校での勤務経験を有する指導主事が、当該校の取組に伴走的に関わり、学校と教育委員会が一体となって、事業の目的達成に向けた支援体制を構築した。

各学校運営連携校における校内体制の構築

・日常的な交流が生まれるよう、校内の環境整備を行うとともに、単元計画の作成段階から複数の教員が関わり、指導内容や支援方法について協議する体制を整えた。

教員研修の実施

・ 12月23日（火）交流および共同学習の研修会
文部科学省　初等中等教育局　特別支援教育課　特別支援教育調査官を講師として両校の教員を対象に研修会を行う。
事前に教員が交流及び共同学習について感じていることを調査官が把握した上で合同研修会を実施し、研修当日は、交流及び共同学習を行ってきた学年同士のグループで、実践の振り返りや課題の共有を行った。

学校運営連携校における取組状況や成果等の横展開

【自治体における取組】
・ 学校運営連携校の取組状況・成果の整理
・ 他自治体（3県）および本事業以外の自治体（1県2市1町）からの視察受入
・ 民間園を含めた園小中の管理職を対象とした研修会や、市民も含めた市全体の研究発表会など、複数回における取組事例の紹介
・ 日本特殊教育学会自主シンポジウムでの話題提供に参加
本市の取組を発信することで、インクルーシブな学校運営に関する関心が広がるとともに、実践を基にした意見交換や検討が行われ、自治体間の学び合いと研究の深化につながっている。

4. 課題と展望

本事業における成果・課題

【本事業の実施を通じた児童生徒・教職員の変容】
・ 交流及び共同学習を継続的に行う中で、児童生徒同士が互いの名前や存在を自然に認識し、共に活動することへの抵抗感が軽減されるなど、相互理解の深まりが見られた。
・ 教職員の間で、交流及び共同学習を行事的に捉えるのではなく、単元を通した継続的な学びとして位置付ける意識が高まった。
【事業1年目から2年目後半にかけての変化】
・ 事業1年目から2年目前半は試行的な取組が中心で、専門性向上には大きな課題があったため、2年目後半から大学等の有識者の助言を積極的に受けることで、支援の充実につながり始めている
【事業最終年度に向けての展望】
・ 事業最終年度においては、大学に加え地域の福祉関係者からも支援を受け、児童生徒が互いの違いを認め合いながら、笑顔で共に学び、共に育つ学校生活の実現のための支援の専門性向上を目指す。